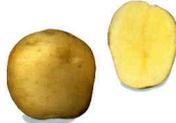


野菜の作業

| 種まき | 定植 (植付け) | 栽培のポイント | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|--|-------------|-----|-----|------|------|--------|--------|--------|------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|------|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|----|--------|--------|--|----------|------|--------|--|----|------|--------|--|-------------|----|--------|--|-------|------|--------|--|----------|----------------------------------|
| ・ホウレンソウ ・コマツナ ・シュンギク ・ハクサイ ・ダイコン ・カブ ・ など 秋バレイショの植付けは、標高500mの地帯で8月下旬になります。品種は、休眠の浅いデジマやニシユタカを利用します  | ・ブロッコリー ・キャベツ ・ワケギ ・レタス など | ○夏野菜の暑さ対策 ・敷きワラ、こまめな灌水などで土壌水分の急激な変化をさげましょう。 ・追肥を行い樹勢を維持します。 ・雨よけハウスなどでは、天井フィルムの上の遮光ネットや寒冷紗をかけて温度をさげます。(ただし、遮光率は20%以下とします。) *特に今年は軟弱気味に生育していると思われるので注意を！ ○主な秋まき野菜の作型と品種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 収穫 ・ホウレンソウ ・スイカ ・メロン ・スイートコーン ・ピーマン ・キュウリ ・トマト ・ユウガオ ・カボチャ ・オクラ など多数！ | <table border="1"> <thead> <tr> <th>種類</th> <th>播種期</th> <th>定植期</th> <th>主な品種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ハクサイ</td> <td>8月中旬まで</td> <td>9月中旬まで</td> <td>黄ごころ65</td> </tr> <tr> <td>キャベツ</td> <td>7月下旬まで</td> <td>8月中旬まで</td> <td>若峰、初秋</td> </tr> <tr> <td>ブロッコリー</td> <td>7月中旬まで</td> <td>8月上旬まで</td> <td>ビクセル</td> </tr> <tr> <td>レタス</td> <td>8月中旬まで</td> <td>9月上旬まで</td> <td>極早生シスコ</td> </tr> <tr> <td>チンゲンサイ</td> <td>9月上旬まで</td> <td>9月下旬まで</td> <td>青帝</td> </tr> <tr> <td>ホウレンソウ</td> <td>9月中旬まで</td> <td></td> <td>オーライ・ソレシ</td> </tr> <tr> <td>コマツナ</td> <td>9月中旬まで</td> <td></td> <td>楽天</td> </tr> <tr> <td>ダイコン</td> <td>8月下旬まで</td> <td></td> <td>耐病総太り、YRくらま</td> </tr> <tr> <td>カブ</td> <td>8月下旬まで</td> <td></td> <td>耐病ひかり</td> </tr> <tr> <td>タマネギ</td> <td>9月上旬まで</td> <td></td> <td>OK黄、泉州黄色</td> </tr> </tbody> </table> | 種類 | 播種期 | 定植期 | 主な品種 | ハクサイ | 8月中旬まで | 9月中旬まで | 黄ごころ65 | キャベツ | 7月下旬まで | 8月中旬まで | 若峰、初秋 | ブロッコリー | 7月中旬まで | 8月上旬まで | ビクセル | レタス | 8月中旬まで | 9月上旬まで | 極早生シスコ | チンゲンサイ | 9月上旬まで | 9月下旬まで | 青帝 | ホウレンソウ | 9月中旬まで | | オーライ・ソレシ | コマツナ | 9月中旬まで | | 楽天 | ダイコン | 8月下旬まで | | 耐病総太り、YRくらま | カブ | 8月下旬まで | | 耐病ひかり | タマネギ | 9月上旬まで | | OK黄、泉州黄色 | ホウレンソウ、コマツナはトンネル、ハウス利用で更に遅まきできる。 |
| 種類 | 播種期 | 定植期 | 主な品種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ハクサイ | 8月中旬まで | 9月中旬まで | 黄ごころ65 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| キャベツ | 7月下旬まで | 8月中旬まで | 若峰、初秋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ブロッコリー | 7月中旬まで | 8月上旬まで | ビクセル | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| レタス | 8月中旬まで | 9月上旬まで | 極早生シスコ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| チンゲンサイ | 9月上旬まで | 9月下旬まで | 青帝 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ホウレンソウ | 9月中旬まで | | オーライ・ソレシ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| コマツナ | 9月中旬まで | | 楽天 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ダイコン | 8月下旬まで | | 耐病総太り、YRくらま | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| カブ | 8月下旬まで | | 耐病ひかり | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| タマネギ | 9月上旬まで | | OK黄、泉州黄色 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

ネギの育苗方法

本県では、秋9月頃播種して翌春4～5月に定植、10～11月に収穫する作型が一般的です。

発芽温度にはかなりの幅がありますが、15～20℃が適温です。本県では8～9月には種しますが、播種が遅れると小苗となって越冬中に寒害を受け、収量が上がらなくなってしまいます。反対に早すぎると苗の生育が進み抽だいするので定植苗の茎が6mm以上の大苗にならないよう播種期を設定します。

地床育苗で秋まきする場合は、苗床面積は本ほ10aに対して1～1.5a、種子量は5～6d1必要となります。は種10～20日前に、a当たり完熟堆肥200kg、苦土石灰20～30kg、窒素・リン酸・加里をそれぞれ2kg程度施し耕運整地しておきます。は種床は、床幅120cm、通路30～40cm、高さ5cmの揚げ床とし、種子は6～10cm間隔の条播きとします。

は種後は薄く覆土し軽く鎮圧の後、わらを敷き十分かん水します。は種後は、7日程度で発芽するので敷きわらを取り除き本葉2枚頃に密生場所を間引きします。

a当たり0.3kg程度の追肥により本葉3～4枚、1本重15～20gの充実した苗づくりを目指します。

タマネギの育苗方法

本県の栽培は秋まき栽培で、収穫期が高温期に入る6月中旬から7月上旬にかけて収穫する作型です。

苗床は日当たりがよく、肥よく有機質の多い排水良好な場所を選定します。有機質が少ない場合は、は種1ヶ月前に完熟堆肥をa当たり400～500kg施用し、耕土と十分混和しておきます。

また土壌酸度もPH6.0～6.5に調整しておきます。

施肥は、a当たり窒素1kg、リン酸2kg、加里1kgをは種10日以上前に施用し十分混和しておきます。(なお、リン酸は半分程度を速効性の過りん酸石灰で施用するのがよい。)

苗床面積は作付け10a当たり40～50㎡を用意し、床幅120cm、高さ15～20cmの短冊型のは種床を作り、床面を平らにならします。発芽後から育苗期前半期の苗は乾燥に極めて弱いので、苗床には種数日前に作り土を落ち着かせておきます。定植の目安は、平均温度が12℃の頃であるのでこの時期から逆算して50～60日前とし、品種によって抽だいの程度が異なるので調整します。

標準的には400～600mで8月下旬～9月初旬、600～800mで8月下旬です。

苗の大きさは、生育・収量・品質などに大きく関与します。大苗になりすぎると抽だいの増加、外部

分球の増加・活着遅れによる凍み抜けの増加などが多くなります。

逆に小苗すぎると越冬時の凍み抜けが多くなったり、肥大開始期の生育量が確保できず小玉化し収量が上がらなくなってしまいます。

* 主用品種の目標とする苗の大きさは、七宝甘 70 で、1 本 4～5 g・茎の太さ 4～5 mm、信州 2 号で、1 本 5～6 g・茎の太さ 5～6 mm、草丈 25～30 cm、本葉 4 枚前後を標準とします。

は種量は、作付け 10 a 当たり 5～7 d l を用意し、は種方法は条まきがは種後の管理作業が容易で揃いが良く、条間 8～9 cm に深さ 6～8 mm の溝を付け、一列に 150～170 粒を播き、種子が隠れる程度に覆土します。は種後は、敷わらを行い、地温の上がりすぎやかん水や降雨による土壌表面の固結を防ぐとともに土壌の湿度を保ちます。発芽揃いには 1 週間程度かかるがこの間、床内を乾燥させないように十分かん水を行います。発芽を始めたなら、日焼けを防ぐため日中を避けわらを取り除きます。

本葉 2 枚程度までは根張りが小さく乾燥に弱いので午前中のかん水を十分に行ってください。

間引きは、本葉 1.5～2 枚頃に株間 1～1.2 cm 間隔になるよう 1～2 回行います。間引きが終る頃から生育が旺盛になり、べと病やスリップスなどの被害がみられるので育苗期間中薬剤散布を 2～3 回行い防除の徹底を図ります。なお、生育前半の苗の生育状況をみて生育量が不足ならば 10 月上旬頃に追肥用の化成肥料を 10 m²当たり窒素成分で 40～50 g 施用し、適正な大きさの苗づくりを目指しましょう。そして苗取り作業は、欠株や大玉割合が減少しないようにできるだけ根も葉も切らないよう丁寧にいきましょう。(2008.9.1 NO61 号も参照ください。)



農業豆知識

長葱の種類と特徴

ネギは、全国的にみると春・夏・秋・冬まきの作型があり、根深(軟白)ネギ、葉ネギ、小ネギがあり、各々の品種を利用し周年栽培されています。

国内の品種分布を見ると、冬は休眠状態で越冬する夏ネギ型の「加賀群」が関東以北と中部地方に分布し、冬期間も休眠せずに生育する冬ネギ型の「九条群」が温暖地方に分布しています。

また、両者の中間型の「千住群」は収量も多く、関東を中心に中間地帯に広く分布しており、最近はこのタイプの品種が寒地の春まき冬収穫作型に利用されています。

関東地方で栽培されているネギを生態別に見ると次の表のように分類されます。

| 品種群 | 代表品種 | 太さ | 長さ | 越冬性 | 収量 | 用途 | 類似品種 |
|-----|------|----|----|-----|----|------|---|
| 加賀 | 下仁田 | 太 | 短 | 強 | 少 | 深 | 松本一本、秋田太、札幌一本、金沢合津太、藤崎、青森地ネギ |
| | 加賀 | 太 | 中 | 強 | 中 | 深 | |
| | 岩槻 | 中 | 短 | 強 | 中 | 葉(夏) | |
| 千住 | 千住黒柄 | 中太 | 中長 | 中 | 中 | 深 | 黒昇一本太、一文字黒昇り、吉蔵、元蔵 他 金長、金彦、長寿、金光一本太、金蔵 他 深谷エース、赤昇、増収二号、西田王喜 |
| | 千住合黒 | 中太 | 中長 | 中 | 中 | 深 | |
| | 千住合柄 | 太 | 長 | 中 | 多 | 深 | |
| | 千住赤柄 | 中 | 極長 | 弱 | 多 | 深 | |
| 晩ネギ | 越谷太 | 中 | 中 | 強 | 多 | 深 | 汐止晩生、吉川晩生太、三春 |

除草剤の種類と特徴

除草剤は、接触した全ての植物を枯らす「非選択的除草剤」と作物に比較的害を与えず対象とする植物を枯らす「選択的除草剤」に分けられます。また、植物ホルモンに作用し成長を阻害するものなどがあり、簡単に分類すると次のような種類がありますので、説明書等を十分理解し、安全で効果的な使用をお願いします。

作用の違いによる分類

- ・接触型：除草剤に接触した部分の植物組織だけを枯らすもの。* 多年生植物には効果が低い
- ・吸収移行型(全草型)：茎葉に作用し、植物体全体に移行するもの。* 接触型除草剤より多くの植物を枯らす。
- ・土壌処理型：土壌に作用し、根から吸収されて枯らしたり、雑草の発芽成長を妨げるもの。

選択的に作用する除草剤の分類

- ・植物(雑草)の種類ごとに持つ異なった酵素、タンパク質、アミノ酸やこれらの物質の合成過程に作用し、枯らすあるいは合成等を阻害し効果を表すもの。

製剤別による分類：粒剤、水和剤、水溶剤、乳剤、液剤、ジャンボ剤、フロアブル剤があります。

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
地域係 中澤普及指導員(25-7156)